

---

《書 評》

金宇祥・趙成権 『세계화와 인간안보  
(グローバリズムと人間の安全保障)』

野 中 健 一

---

今、我々の生活基盤が各種危機に直面している。危機は軍事上の危機ばかりでない。国境を越えた各種犯罪やテロ、環境破壊、失業者の増大、差別問題等、問題点を挙げていけばきりが無い。

実はこれら諸問題は既存の安全保障研究において軽視されてきた（あるいは無視されてきた）。安全保障研究が長期間、事実上、国家安全保障研究を意味してきたためである。しかしこのような研究状況は問題であろう。国家の安全が保たれていたとしても、国内の治安状況、経済状況等が極度に悪化していたら、新たな対策の必要性を感じる者もいるのではないか。すなわち国家安全保障に対する配慮と同時に、人間一人一人の生活基盤を守る安全保障政策が必要であるとの声が挙がっても不思議でない。この人間一人一人の生活基盤を考察する学問領域こそ「人間の安全保障」である。同領域は研究蓄積が希少であるがゆえに、研究者による知的貢献が急がれているのだ。

本書『グローバリズムと人間の安全保障』は我々の生活基盤を犯している各種

の危機に関心を有している人材にぜひ検討してもらいたい著作となる。同書の著者は金宇祥と趙成権。前者<sup>1)</sup>はアメリカ外交、国際政治理論を、そして後者<sup>2)</sup>はテロ問題、政治腐敗等を長年研究してきた韓国における大学教授である。本書は彼らの専門知識を余すところなく吸い上げた上で執筆されている。

筆者は本書を関係各位に推薦しようと考えている。しかしその理由は後述するとして、まずは本書の内容紹介に入るべきだろう。以下、各章の構成及び紹介となる。

第一章 グローバリゼーション時代の国際関係

第二章 グローバリゼーションと21世紀国際秩序の展望

第三章 民主平和論

第四章 人間の安全保障

第五章 人種紛争

第六章 強大国の介入

第七章 国際テロリズム

第八章 国際麻薬密売

第九章 国際組織犯罪

第十章 ネット戦争

『北東アジア研究』第12号 2007年2月)

以下、各章の紹介に入りたい。第一章はグローバリズムの定義や特徴を論じている。主に先行研究の紹介に頁数を割いており、議論を展開する上での準備作業と言える。本書の議論は事実上、次章より始まる。

第二章は米国の「覇権(すなわち国際公共財の供出)」について論じている。著者は米国が「覇権国が衰退時に見せる現象」を多々有していると指摘した。しかし一方で今後米国が挑戦国(中国)への配慮を示しつつ、「低開発国家への経済的、人道的支援」、「グローバリゼーションの影響を受けている発展途上国への配慮」等、諸々の政策を執行した場合、現在の地位を維持できるだろうとした。

第三章はデモクラティック・ピース論の考えを通して、北東アジア地域の安定性を論じている。著者は先ず、同地域が冷戦終結にもかかわらず、極めて不安定な状況にあることを危惧している。その上で民主主義国家同士が戦争を起こす可能性が低いとの学説をもとに、ロシア、中国、そして北朝鮮の民主化の重要性を論じているのだ。著者は上記三章をもって、現在の国際関係に見出される諸特徴を論じている。言うなれば、人間の安全保障を論じる上での前提条件を分析しているわけである。以下、人間の安全保障に関する諸議論となる。

第四章は人間の安全保障を扱っている。特に同概念が有する問題点を扱っていると云えよう。著者は先ず人間の安全保障を

「世界の所々で発生する人間個々人の安全に対する脅威、すなわち恐怖と窮乏からの自由を守るための方法を探すアプローチ」と説明した。その上で、これが先進国の対発展途上国への干渉道具となつてはならないこと、そして第二に自由民主主義体制が人間の安全保障を追及する上で万能ではないことを指摘した。

第五章は人種紛争を主題としている。特にその被害の甚大さと解決困難性を論じた上で、著者なりの対処法を提示している。著者は紛争解決策として用いられる公的交渉、公的会議の類(Track 1 外交)に対し懐疑的である。むしろ非公式な会合(Track 2 外交)の効果にこそ注目している。

第六章は内政不干渉の問題点を扱っている。著者は先ず、内政不干渉が国際的に認められた原則であると確認している。しかし一方で特定国家において人権蹂躪(すなわち人間の安全保障上の危機)の事例等が見られることも事実であり、これに対し「人道的介入」の必要性を認めているのだ。ただし、無制限の介入を認めているわけではなく、その条件をも示している。特にミドルパワー国家や弱小国の主張に配慮した介入でない限り、成功する可能性は低いと論じた。

第七章はテロの特性を明らかにしている。特に近年の傾向として「組織が階層化しているのではなく、細胞化している点」、「少数の関係者によってテロが実行されているために生じる非理性的暴力(民間人の

大量殺傷等)の出現」等を挙げている。

第八章は国際麻薬密売の実態を扱っている。そこでは麻薬生産国家の多くが開発途上国であり、経済的に不安定な状況にあると指摘された。また国家権力層と麻薬生産者の関連性、麻薬生産国における犯罪組織と国外犯罪組織の相互補完的役割、麻薬密売によって得られた収益がマネーロンダリングされている現状が説明されている。

第九章は国際犯罪の構図を明らかにしている。特に主要国の大型犯罪組織を事例にその国際性が指摘された。その上で20世紀最後の10年間は、国際犯罪の世界化の10年であったとも論じている。それほどまでに犯罪が国境を容易に飛び越えているのに対し、国境をまたいだ捜査機関の協力が不十分である指摘された。

第十章は個人、団体、そして国家によるネット犯罪・テロを論じている。特に著者は事実上無法地帯と化しているネット空間を「万人に対する万人の闘争状態」と評しており、これに対する国際協力の成果が充分でないとして事例を挙げつつ論じている。特にネット犯罪・テロの破壊力は軽視しえず、個人、団体、そして国家もまた深刻な被害を受けうるのである。

上記が本著作の紹介となる。以下、本書の評価を行いたい。

評価すべき点は先行研究との対比の中で浮かび上がる。しかし、先行研究を取り上げる前に、人間の安全保障が扱う「守備範囲」を確認しておく作業が必要だろう。

ここでは国連開発計画(United Nations Development Programme)の『人間開発報告書 1994』(*Human Development Report 1994*)を取り上げたい<sup>3)</sup>。同書こそ人間の安全保障を議論し始めた報告書であり、この領域における基本文献となるためである。

報告書において人間の安全保障は七領域あるとされた。すなわちEconomic Security(経済安全保障)、Food Security(食料安全保障)、Health Security(健康安全保障)、Environmental Security(環境安全保障)、Personal Security(個人安全保障)、Community Security(共同体安全保障)、Political Security(政治安全保障)である。筆者が本稿において与えられている頁数の制約上、各領域の説明を省かざるを得ないが、人間の安全保障が極めて広範囲に渡る領域を扱っていることは理解出来よう(研究者によっては、人間の安全保障が一層広範囲の領域を扱うべきと論じる者もいる<sup>4)</sup>)。国連開発計画は「飢餓、病気そして抑圧等、慢性的な脅威から人々を守る事」、そして「突然かつ有害な混乱から日常生活を守る事」の二点を人間の安全保障の要と論じた。すなわち、これら二点に対処するための議論は全て人間の安全保障で関心を払うべき領域とされてしまうのである。

さて、これほど広範囲の領域を扱うからには、先行研究で見られる研究蓄積もまた広範囲に渡る。「グローバリゼーション下の競争力<sup>5)</sup>」「グローバリゼーション下の

『北東アジア研究』第12号 2007年2月)

雇用問題<sup>6)</sup>」「食糧問題<sup>7)</sup>」「移民問題<sup>8)</sup>」「環境問題<sup>9)</sup>」「ジェンダー<sup>10)</sup>」「貧困<sup>11)</sup>」「地雷<sup>12)</sup>」「テロリズム<sup>13)</sup>」。これらが近年、全て「人間の安全保障」の名のもとに出版された先行研究の一部である。

しかし、これほど広範囲に渡るものでも本書 すなわち『グローバリゼーションと人間の安全保障』で取り上げているような「麻薬問題」や「ネット戦争」まで扱っているものは少ない。しかし、これらもまた「人間の安全保障」の枠組の中で検討(再検討)すべき問題であることは言うまでもない。未だ先行研究が少ない領域を人間の安全保障の枠組の中で検討したことこそ、評価すべき点となる。

さて、本書は上記のごとく評価すべき箇所を有しつつも、惜しまれる点がないわけでもない。それは一部の章が人間の安全保障問題に対する「対処策」を論じていない(あるいは簡略にしか扱っていない)点である。

指摘するまでもなく、人間の安全保障は「学問のための学問」では決してない。国際機関と一部政府等が危機への対処策を考究している状況を軽視してはなるまい。確かに上田秀明が論じているように、日本の外務省自身、未だ同問題に対して手探り状態のところがある<sup>14)</sup>。しかし2003年に発表された*Human Security Now*(国連人間の安全保障委員会による報告書)<sup>15)</sup>の存在を勘

案するだけでも、やはり対処策を意識した分析が欲しくなるところである。

当然ながら筆者は*Human Security Now*を唯一絶対的権威として祭り上げるつもりはない。ただ、同書が指摘した*Protection*(保護)と*Empowerment*(能力強化)をもって人間の安全保障上の危機に対処するとの指摘は無視して良いものではあるまい。同指摘を受容するのであれば、批判するのであれば、人間の安全保障研究者は同書に対する何かしらの態度表明を行う必要があるであろう。

さて、本稿を締めくくるにあたり、一点指摘しておかなくてはなるまい。筆者自身、上記で本書の一部を批判したものの、これにより本書の価値が否定されるわけではない。むしろ本書は読了することにより多くの利益を与えてくれるだろう。

そもそも本書著者は序文において「この本の研究結果は現存の国際関係関連の教科書では紹介されていない、あるいは紹介されていたとしても不十分な部分」<sup>16)</sup>に該当すると告白している。すなわち本書は未だ発展途上の研究領域における第一歩を記す研究なのである。惜しまれる点が仮に存在したとしても、それは今後の課題と言えよう。かように本書を捉え直した時、本書により得られた知識は一層貴重に感じられ、両著者の今後の研究が一層期待されるのである。

金宇祥・趙成権 『세계화와 인간안보(グローバリズムと人間の安全保障)』

金宇祥・趙成権 著

『세계화와 인간안보(グローバリズムと人間の安全保障)』

ISBN : 89-303-1217-9

267P

集文堂

## 注

- 1) 金宇祥は延世大学の教授である。同氏による最近の研究として、以下を挙げることができる。 「米国の対内外軍事負担とヘゲモニーの衰退」(原文韓国語) 慶南大学校極東問題研究所編、『韓国と国際政治』(8巻2号) 1992年、105-126頁。「現実主義と自由主義の視覚に基本を置いた戦争原因研究」(原文韓国語) 慶南大学校極東問題研究所編、『韓国と国際政治』(11巻2号) 1995年、93-113頁。「ロシアの朝鮮半島政策変化と韓国の立場」(原文韓国語) 済州大学校平和研究所編、『東アジア研究叢書』(12集) 2001年、180-187頁。
- 2) 趙成権は漢城大学の教授である。同氏による最近の研究として、以下を挙げることができる。 「腐敗の政治経済学」(原文韓国語)、韓国腐敗学会編、『韓国腐敗学会報』(創刊号) 1997年、173-192頁。「メキシコの政治腐敗と麻薬密売」(原文韓国語) 韓国腐敗学会編、『韓国腐敗学会報』(第2号) 1998年、125-138頁。「911テロ以後、米国の対テロ政策の変化に対する分析と展望」(原文韓国語) 韓国国際政治学会編、『国際政治論叢』(43集2号) 2003年、295-318頁。
- 3) 本稿は以下を参照しつつ、複数個所で*Human Development Report*を引用した。 *United Nations Development Programme, Human Development Report*, 1994, pp.22-46.
- 4) 横田洋三、「『ヒューマン・セキュリティ』の理念とその具体的展開」、東海大学平和戦略国際研究所編、『*Human Security*』(No. 4) 2000年、106-107頁。
- 5) Kay Cristobal, *Globalisation, Competitiveness, and Human Security*, Frank Cass and Co., 1997.
- 6) Donald Lamberton, *Managing the Global: Globalization, Employment and Quality of Life*, I B Tauris and Co., 2002.
- 7) Edward J. Clay, *Food Aid and Human Security*, Frank Cass and Co., 2000.
- 8) David T. Graham, *Migration, Globalism, and Human Security*, Routledge, 2000.
- 9) Edward A. Page, *Human Security and the Environment: International Comparisons*, Edward Elgar Pub., 2002.
- 10) Chhashhi Amrita, Wieringa Saskia, Trunong Thanh-Dam, *Engendering human security: Feminist perspectives*, Zed books, 2006.
- 11) Weber Heloise, Thomas Caroline, *The politics of Microcredit: Global governance and poverty reduction(Human security in the global economy)*, Pluto Pr, 2005.
- 12) McDonald Bryan, Matthew Richard Anthony, Rutherford Ken, *Landmines and Human security: International politics and war's hidden legacy*, State University of New York Press, 2006.
- 13) Nelles Wayne C., *Comparative education, terrorism and human security: from critical pedagogy to peace building*, Palgrave Macmillan, 2003.
- 14) 上田秀明は外務省国際社会協力部長(肩書は当時)。上田秀明、「日本の外交における『ヒュ

『北東アジア研究』第12号 2007年2月)

ーマン・セキュリティ』、東海大学平和戦略国際研究所編、『Human Security』(No.4)、2000年、115頁。

15) 本稿は以下を参照しつつ、複数個所で*Human Security Now*を引用した。Commission on human security, *Human Security Now*, United Nations Publications, 2003, pp.10-12.

16) 金宇祥・趙成権、『グローバリズムと人間の安全保障』、集文堂、2005年、5頁、ソウル。

(NONAKA Kenichi)